歴史地震
第29号(2014) 248頁

［講演要旨］1596年豊後地震における被害の再検証
―豊後府内を除く地域について―

松岡 祐也 (仙台市博物館 市史編さん室)

§1. はじめに

文禄五年(慶長元年, 1596)閏七月十二日に発生した, いわゆる豊後地震は, その際に発生した津波の被害がよく知られている. 豊後地震による被害として, これまで豊後府内周辺の被害が特に注目されてきた.

昨年の歴史地震研究会では, 津波による大きな被害を受けた沖の浜の位置の検討とともに, 現在の大分市中心部の被害について, 史料の読み直しによる再検証を行った. 今回は, 昨年対象としなかった大分市内周縁部から市外地域について, 昨年同様に被害の再検証を行う.

§2. 大分県内の被害の再検証

豊後地震の被害は, 主として大分県内のものがよく知られている. これまでは, 史料の素性を明らかにすることなく被害の検証が行われてきたが, 史料そのものを吟味する必要もある. ここでは, 史料の吟味とともに高田と臼杵の被害について検討する.

2.1 「高田」の位置と被害

ルイス・フロイスの報告によると,「高田(フアカタ)」という場所が津波の被害を被ったとある.『日本歴史災害事典』では, この「高田」を現在の豊後高田市に比定しているが, フロイスの報告では「高田」には4000 人以上のキリスト教徒が住んでいたとあり, 豊後高田市ではこの点が一致しない.

地震より少し前の天正年間(1573～1592), フロイスはその著作『日本史』中で, 豊後国内に住むキリスト教徒の数を挙げている。その中で, 大野川流域の高田には 1000 人ほどのキリスト教徒がいたとある. この高田は低地であり, 江戸時代に何度か洪水の被害を受けたという. フロイスの報告にあるキリスト教徒の数は誇張があるようだが, ここでの被害についても宗教的な奇跡を強調するために被害を誇張した可能性があり, 少し検討の余地があるように思われる.

2.2 臼杵の被害

臼杵藩稲葉家の年譜『稲葉家譜』によると, 古老の語るところとして, 豊後地震時に臼杵では「臼杵原山麓今川崎藤八重昌宅前之坂口」まで津波が来たという. この記述は 1707 年宝永地震の記事中にあらわれる. つまり, 豊後地震から 100 年以上が経過した頃に語られたことになる. 地震後 100 年以上経って語られた話であり, 実際の被害よりも誇張されている可能性もある.

ただし, 史料の記述より, 豊後地震による被害は, 臼杵ではかなり大きな印象を残していたことがうかがえる. また,『稲葉家譜』自体は宝永地震よりも後に編纂されたものだが, 引用した文書を掲載するなど, 質の良い史料と言える. 以上より, 臼杵での津波浸水はある程度の信憑性を持っていると考えられる.

なお『稲葉家譜』には, 2.1 で示した高田の津波被害と, 佐賀関の「佐賀関神社之鳥居流」という被害も記載されている.

§3.大分県外の地震被害

この時期, 大分県外でも地震が発生している. 例えば, 愛媛県宇和島市では, 板島城(後の宇和島城)が地震により被害を受けたとされる. これは, 地震の前年(1595)に板島城に入城した藤堂高虎を初代とする, 津藩藤堂家の年譜の一つ『公室年譜略』による. この史料では, 板島城の被災は閏七月十二日とされている.

では, この宇和島の被害は豊後地震によるものなのだろうか. 日付に注目すると, 宇和島の被害は豊後地震によるものと考えることができそうである. しかし,『公室年譜略』は地震から 180 年ほど経って書かれた史料であることから, 日付の誤りも十分検討せねばなるまい. また被害記事ではないが, 広島県三原市にある仏通禅寺の地震記録にも日付の問題がある. 四国・瀬戸内地域の地震記事は, 同じ日付だからといって, 単純に豊後地震によるものとはいえないだろうと考える.

§4. おわりに―文禄五年第三の地震の可能性？

文禄五年には, 豊後地震と伏見地震という M7 クラスの被害地震が起きており, その発生日は1日しか違わない. 愛媛や広島での地震は, この 2 つの地震のいずれかによるものなのか.

史料記載の日付についてはさらに検討を加える必要があるが, あるいは文禄五年には豊後・伏見とは別の地震が存在した可能性はないだろうか. 鹿児島では閏七月に 3 度の有感地震があったと記録されている日記があるが, これがその証拠となり得るかもしれない. この可能性の是非を明らかにするためにも, さらに四国・瀬戸内地域の史料調査を行う必要があるだろう.